

うばやしき
受賞者：姥屋敷集落（岩手県滝沢市）

天皇杯
受賞年：昭和57年



むらづくりの経緯

- ・当該集落は、昭和20年代に中国東北部（旧満州）から引揚げた方々と地元既存農家で構成されている。
- ・標高350m～550mの丘陵地で年平均気温が7.5度と低く、積雪期間も120日間と長い。土質も強酸性の火山灰土壌であり、自然条件は極めて厳しい。
- ・このような中、自然条件に適した作目の導入や地域の環境整備に向けた話合いや共同作業を通じ、集落の連帯感を醸成し団結の強化を図ってきた。

受賞当時

生産活動の特色

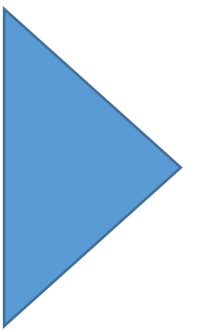
- 酪農の導入に向け、開墾・牧草地拡大を実施すると共に、機械化一貫体系を確立し、酪農経営規模の拡大を推進している。
- 夏期冷涼な気候を活かし、レタス・長芋等の高冷地野菜を導入し拡大している。
- S51年の農用地利用増進事業促進対策事業による利用権の設定、S55年の農用地利用改善団体指定等を通じ、担い手への農地集積を推進している。

地域づくりの特色

- 既存農家と開拓農家の一体化を進めるため、「夜叉平地区委員会」を結成し、公共施設等の設置に向けた共同討議及び運動、道路補修等の共同作業を実施している。
- S46年に拓魂碑を建立し、連携の場として、夏まつり（拓魂祭）を毎年地域をあげて開催している。
- S51年に自治会を再編（役員の集落選出制）し、婦人会や子供会を含め一人一人が地域の柱として活動している。

～受賞直後の効果～

・住民の中に誇りが生まれ、よりまとまりのある地区となった。



高冷地野菜
（長芋栽培）

現在（令和5年フォローアップ時）

評価ポイントの取組状況

- 酪農の現状
農家数は減少傾向にあるが、コントラクター事業や酪農ヘルパー事業、畜産クラスター事業を活用し、経営規模の拡大及び経営基盤の安定強化の取組を進めている。
- 高冷地野菜の現状
数戸が法人化されており、市内においては高い生産量を占めている。

項目	受賞当時 (S56)	直近 (R3)
酪農家数	47戸	20戸
乳牛飼養頭数	1,246頭	1,176頭
担い手への農地集積率	—	69%

（注）直近の数値は令和3年時点

- 担い手への農地集積が進んでおり、人・農地プランの中では水稻や野菜、酪農において32名と4法人が担い手に位置づけられている。
- 地区民自らが公衆用道路の改修作業に無償で従事する「マイロード事業」に、継続して取り組んでいる。
- 中山間地域等直接支払交付金事業に取り組んでおり、約7.4haがその対象となっている。
- 地域での一大事業である夏まつり（拓魂祭）は、コロナ禍の影響により中止しているが、再開に向け準備している。
- 自治会はまとまりがあり、市立小中学校を地域の中心と位置づけ、学校の運動会や文化祭は地域の主要行事となっている。

今後の展開

- 高齢化や後継者不足の進行により、担い手の確保が課題となっていることから、農業後継者の確保育成を進めることにより、生産基盤を確かなものとし、自然豊かで、より暮らしやすい地域を目指す。

受賞者：野田区（愛知県田原市）

内閣総理大臣賞
受賞年：昭和57年



むらづくりの経緯

○田原市野田区(旧野田村)は、昭和30年、町村合併により、田原町(現田原市)の一部となった。野田区におけるむらづくりは、昭和30年の、旧町村の自治機能を維持、育成することが農業の振興、生活環境の改善のため重要との合意形成がなされ、12集落の総代及び12集落を取りまとめる大総代による、「総代会制度」によるむらづくり体制が創設された。
○昭和43年の豊川用水の開設を機に、農業振興を基本とすることを住民の総意で定め「魅力ある農業と心豊かな村づくり」を進めることとした。また、昭和40年代後半以降、各種補助事業を積極的に取り入れ、施設園芸団地及び畜産団地を造成し、農業振興に寄与。

受賞当時

生産活動の特色

○昭和53年度、集落の総代を中心とした話し合いを行い、「土地利用計画」及び「環境5原則」を策定した。
○「土地利用計画」では、将来必要な「園芸用地」、「畜産用地」の区域を定め、集落内に分散していた施設の移転を促進し、規模拡大と、集落の生活環境の改善を図ることとした。
○「環境5原則」とは、温室、畜舎などの建設によって、集落の環境に悪影響を与えないよう、必要な事項を定めたものであり、温室・畜舎を個人で新設・移転する場合にも守られている。

【環境5原則】

- ①農振・農転・建築など申請前にまず総代さんへ事前協議しよう。
- ②畜舎・温室などを建設しようとしたら指定地区内かどうか確認しよう。
- ③畜舎建設：隣接地が農地の場合・・・境界線より3m離す。
道排水路の場合・・・境界線より2m離す。
- ④温室等建設：全ての境界線より2m離す。
- ⑤畜舎・温室を建設する場合まず用排水を完全に。

地域づくりの特色

○集落を超えた旧町村の活動が、行政主導や形式的なものでなく、総代会制度を通じて全住民の意向が反映される組織として、むらづくりを構築してきた。
○集落美化運動、野球大会や、盆踊り大会などのコミュニティ活動、婦人グループ活動等、農家・非農家が一体となった活動が行われ、豊かなむらづくりが展開されている。

～受賞直後の効果～

・より一層努力する機運が高まり、カーネーション等の高収益な作物生産に取組むなど、農業産出額日本一である田原市の農業の発展の一翼を担っている。



出荷前のカーネーション



多くの区民が参加する「野田夏祭り」

現在(令和5年フォローアップ時)

評価ポイントの取組状況

○「園芸団地」、「畜産団地」は維持されている。
カーネーションの作付面積は増加。肉用牛の飼養戸数は減少。豚は、平成4年に新たな団地が造成されたが、現在は受賞当時と変わらない。また区内世帯数は、新たに集合住宅が建設され受賞当時より増加したものの現在は減少している。
園芸団地及び畜産団地では今後、後継者の確保が課題である。
○むらづくりの主体であった「総代会」に代わる「コミュニティ協議会」を設立(平成23年)、「野田校区まちづくり推進計画」を策定(平成29年)し、伝統、文化を継承しつつ、地域の活動を積極的に行い、安心して住み続けたいと感じられる町づくりを目指している。(ただしコロナ禍のため、現在3年間活動を自粛)

表 カーネーション作付戸数・面積、肉用牛・豚の飼養戸数及び世帯数

	カーネーション		肉用牛	豚	世帯数
	作付戸数	作付面積	飼養戸数	飼養戸数	
受賞当時	13	2.1ha	9	11	670
平成30年	10	2.3ha	3	13	938
現在	9	2.3ha	3	11	857

今後の展開

○「土地利用計画」、「環境5原則」を引き続き守り、農業の振興と生活環境の改善に取り組む。
○新規就農制度等を活用しながら団地内生産者の後継者が確保できるよう取り組む。
○コロナ禍で活動できなかった野田夏祭りなどのコミュニティー活動を行い住み良いまちづくりに取り組む。